近世日蓮教学における一念三千と妙法五字について（三）

本　田　榮　秀

今回は「妙法五字の受持」という、やや抽象的表現から一歩を進め、法華礼誦法要式もしくは日蓮自身が遺文に示した題目修行の遍数すなわち、一座の法会で何回の題目を唱えるなかに焦点を当て、宗祖遺文並びに近世諸家の著書のうちから代表的なものを選び、具体的な数値を拾って題目遍数に表わしてみた。

まず妙法五字（Saddharma Puṇḍarika Sūtra）が日蓮遺文の上に持つ意義を分類し、紹介すれば次のとおりである。

㈠　一念三千を識らざる者には妙法五字の内にこの珠を包み末代幼稚の頸にかけさしめたもうという『本尊抄』にいう妙法五字即一念三千として

㈡　一部八巻二十八品六万九千三百八十四の文字、一字ももれず、かけずおさめて候という『妙法尼御返事』にいう妙法五字即法華一部肝要として

㈢　法華経の題目を本尊とすべしという『本尊問答抄』にいう妙法五字即本尊として

㈣　妙法蓮華経の法体は即ち十界依正の当体なりとする『当体義抄』にいう妙法五字即十界依正当体として

㈤　上行菩薩に譲り給いし題目の五字を日蓮が弘めるとする『四条金吾殿御返事』にいう妙法五字即上行所伝、神力別付の要法として

宗祖日蓮にとって妙法五字は釈尊の因行果徳、一念三千の功徳であり、寿量所顕の良薬、如意宝珠、一切経の惣要『十界依正の当体、更には日蓮自身本化上行菩薩の応生として、如来使として末法の衆生の心田に植えつける下種の要法として付託された妙法五字七字であり、本仏釈尊の実体そのものであった。

これに対して近世教学を代表する優陀那日輝の場合も、勿論日遺文を基として彼の教学が成立している以上、妙法五字七字の解釈も表現の差はあれ日蓮の意を踏えたものであるこ

とは言うまでもないが、時と人を異にする点で根本的な相違が指摘されよう。これは天台智顗と同じく一切経中、妙法華経を依経とし如来出世の本懐としながら、日蓮が遂には天台流の観念観法を去って妙法五字七字の弘通に生涯を賭けるという、いわば天台止観を核とする遠心的な態度を採るのに対し、日輝のそれは日蓮によって示された妙法五字七字を手掛かりとしながらも天台止観の核に還らんとする求心的態度ともとれる。

当時台学心酔の、いわゆる檀林教学の弊風に対して祖書を中心に宗祖日蓮の真精神に還ろうとする努力が日導の『祖書綱要』二十三巻に結実された事実は教学史上明白であるが、この日導を起点に本妙日臨を伝承の師とする日輝が教団の質的向上を目指して教学の集大成を図り、学問を最重視したこともまた明らかである。ただ注目すべきはこの学問組織化の最高唯一の基準が天台教学であったという皮肉な事実である。

例えば彼の『四教儀決疑』『玄籤微録』『文句記微録』は勿論、彼の学室「充洽園」の法要式『法華観心讃行儀』は師たる日臨の『妙経観心略解讃』を踏襲したものであり、法華経二十八品各章をすべて観心的立場で解説し法要式としたものである。また『唱題運想儀』には「ひとたびも南無妙法蓮華経と唱え奉れば則ち事の一念三千正観成就し常寂光土現前し、無作三身の覚体顕れ云々」とあるように観念観法の手掛かりとしての唱題を強調する。法華信仰のあり方で、このように上根下機を峻別し、上根には観念、下機はひたすら信心唱題を奨めようとする態度はいわゆる観心宗学を形成する近世諸家に共通の傾向で日臨の『略解讃』の冒頭にも「所縁を一境に繋けて観恵を撃発(きやくはつ)し、所唱の玄題をして在縁分明深く妙法の境界に入らしめん」とあり、天台の『円頓章』を原典としたことが明らかである。

いっぽう日蓮遺文『如説修行鈔』や『報恩抄』に示されるように有智無智をきらわず、日本国の一切衆生に等しく題目修行を奨め、自らも唱える日蓮の在り方は近世諸家と比較し時代と人の距りはあるにせよ、その相違はむしろ対照的と言わざるを得ない。『如説修行鈔』にいうように、いかなる苦難に遭うとも「命のかよはんほどは南無妙法蓮華経と唱て、唱へ死に死(ニ)る(ヌ)」ならば成仏疑いないことを門下に示している。

日蓮の唱えた題目遍数を受けて近世諸家がどのように唱題修行を実践したかを文献で確認すれば、次のような図表となる。

これを要するに、まず題目遍数において、図表に示すとおり宗祖日蓮が一遍乃至千万遍であるのに対し近世諸家の場合は一遍乃至数万遍である。ただ日蓮の立場はそれまでの称名

念仏を改め、法華経の題目信仰を新たに樹立したところに存在の意義があり、妙法蓮華経の五字と南無を冠した七字を同義と見做し五字七字と呼んで区別しないように、遍数による厳密な意義の相違を彼に期待するのは当を得ないと思われる。

題目遍数表

著者	出典	遍数
宗祖日蓮	法華題目鈔（定遺 44）	千万 十万 六万
	内房女房御返事（定遺 376）	五万
	臨終一心三観（定遺続篇 52）	壱万
	上野殿母尼御前御返事（定遺 388）	百千
	法華本門宗要鈔下（定遺続篇 44）	拾
	聖愚問答鈔下（定遺 43） 法華題目鈔（定遺 44）	壱
日透	本門事一念三千義下	遍数を限らず（四，五遍は不可）
日導	祖書綱要刪略（首題五字法華極理章）	時々念々
	同上（分別智愚行相同異章）	数万
	同上（灌頂口伝文相消釈章）	壱
日臨	本妙日臨律師全集（本化別頭教観撮要）	時々念々
	同上（妙経観心略解讃）	壱
日輝	充洽園全集（宗祖御遠忌修行儀）	参百
	同上（法華観心讃行儀）	五百（50×10）
	同上（弘経要義）	拾数

しかしながら近世諸家ことに優陀那日輝の学室「充洽園」での宗祖日蓮第五百五十遠忌の法要で唱えられた題目遍数三百遍、同じく法華観心讃の法会で、初会にはじまり、妙法蓮華経一の巻から八の巻、仏説観普賢菩薩行法経の結経に至るそれぞれ唱題五十遍十座合計五百遍の題目を修行する詳細な記録は蓋し法華礼誦法要式の圧巻であり、施餓鬼法要式などとともに今日宗定法要式の基本をなすもので、正確な題目遍数と見做すことができるであろう。

結局近世諸家が宗祖日蓮の遺文に従がい、その教義を忠実に伝えんことを志しながら、いわゆる観心宗学の名で呼ばれる原因としては、日蓮にあっては、日本国の一切衆生を有智無智を嫌わず、等しく末法弘通の対告衆としたのに対し、彼等は布教の相手を上機下根に分け、無解の信心よりは有解の観心を尊重したことにあると思われる。このことはすでに各方面で論ぜられるように、文運興隆の時代にあって、有識の善男善女を相手として、仏教そのものの質的向上と学問的組識化を迫られた時代背景とも分ちがたく結びついていたことは考慮されねばならないであろう。

（中村学園女子高等学校教諭）